

世 た か む い

発行・古平町史編纂室
文化会館 842・2590
第198号 平成18・3・1

年表で読む

古平の歴史

[103]

畜産業

牧畜業

①

◇古平の畜産

古平は昔から漁業を基盤として集落がつくられた漁業のまちであるが、人口の増加と共に古平川流域には農業も発達した。しかし、畑作や果樹、水田などは盛んになつてきたが、畜産業は開拓の初期の頃わずかに行なわれただけで、その後、継続され発展することはなかった。一時期、輸送のための鞍馬が飼育されていたが、用途がなくなると、専業農家で農耕馬として飼育されるだけになった。

ほかの家畜についても、専業と

して少数だが飼育されたことはあつたが、間もなく廃業している。戦後になつて、牧畜や養豚がかなりの規模で行なわれたが、現在にはほとんど経営されていない。漁業が町の産業であることから、肉や牛乳の需要が全く無かつたことが、産業として発達しなかつた理由であらう。

◇駅通用としての馬

文化四年（一八〇七）、東蝦夷地（十勝・日高地方）から、西蝦夷地（後志以北の日本海沿岸）に馬が送られて来たが、古平場所に入つたのは安政四年（一八五七）にさかのぼり、当時、場所請負人であつた岡田家に駅通（えきてい）現在の郵便の古い呼び名で、郵便や荷物などを受け渡しして

運んだ）を委託し、そのための馬として使用させたという記録がある。

その頃、積丹半島地方を旅した目賀田帯刀（めかた）たてわき、安政三〜五年、幕府の命により北海道・樺太の地理調査を行なつた。その時、各地の沿岸の風景画を彩色で描いたが、古平会所から美国に向かう駄馬四頭の図を描いたものがあるというが、現物は見えていない。

安政四年当時は、一般住民が馬を飼うことは以前の通り禁止されていて、願ひ出た者に官馬を貸し付けていた。それから間もない文久元年（一八六一）から、場所請負人や出稼人に馬を持つことが許されるようになった。

明治二年（一八六九）古平運上屋に馬守（どんな）仕事をしていたのかよくわからないが、文字から判断するより（ない）に丈助という使用人がいて、駅通（えきてい）つぎたて用の馬が飼育されていた。

下の写真にあるように、古平からは余市までと、美国・積丹を受け持つていて、札幌などへは余市で受け渡しをしていた。

←明治五年壬申年

御用状請印帳

四月 古平郡駅通

覚

一御用状 壹封

札幌 庶務掛 御中

會計掛 古平郡

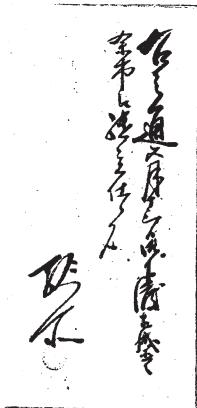
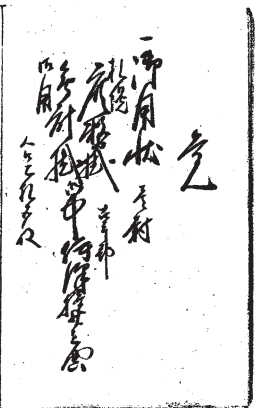
御用 伊沢権少主典

人足札五枚

右ノ通り五月十三日御下渡相

成直ニ余市へ継立仕り候

駅所 印



大正一三年ゝ 続く

▼一〇月三日

起床六時半、海岸を散歩す、大謀は小サバくらいで一向に思わしくない。イカつけは久し振りで出たが、今朝は二〇〇〜五〇〇とれたとのこと。月夜まわりでひと漁あるかも知れぬ。雨も上がって昨日から上天気、私も農園へ行く、熊さんは49号の袋外しだ。時々リンゴを一〇銭、二〇銭と買いに来る。甚内でナシを買いに来たので一貫五〇銭で五貫売る。ナスをとったり大根すぐり、小豆落しなどなかなか忙しい。午後から父や子供たちが来る、子供たちはリンゴやナシを食べては喜んでゐる。ナシのパーレットが黄色になったので、つかい物にするというので五〇斤程もぐ。夜九時頃からまたイヤな雨になる。

▼一〇月四日

起床六時、海岸を散歩す。曇り空だったが49号の袋外しが少し残っているので八時頃農園へ行く。一〇時頃妻も来て、当座漬け用にとタイ菜、大根などをとる。タイ菜、大根は良い出来で来る人は皆ほめていく。カボチャ

だけが不作だったがあとは何れも良い。昼前からまたイヤな雨になり、風が吹いて落ちれば困ると板倉前の19号をもぐ。色も玉も見事だ、一つ百匁もあるようなものもある。今日もリンゴ買いが来て五円程売る。五時頃雨の中を帰る。夜、店の前に出すり

▼一〇月五日

起床六時、ずいぶん寒くなった。朝の内は曇り空であつたが追々

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

<109>

天気になり、八時半農園へ行く。

この天気まわりに袋外しをやるべく、熊さんと二人で一生懸命やる。日曜日なので子供らが遊びに来る。昼食の用意をするとしてユキちゃん、トシが来て、イモ、キャベツ、ニンジンなどを入れてサツマ鍋を作る。ムシロを広げ食事だ。子供らも喜んでゐる。大勢で食べるのも愉快なもので、畑での料理は特においしい。三時

頃にはカボチャとイモの塩煮、大いに食べて遊んで、子供らは五時頃帰った。六時過ぎ仕事を終えて帰ったが、夜、観音滝の件につき禅源寺で協議があり、一時帰る。

▼一〇月六日

起床六時、海岸を散歩す。エビス倉の角にある貯水池が立派に出来た、火防上よいことだ。七時過ぎ 困へ行き、昨夜協議した観音滝のことを話す。高橋、

困 主人、長野、小野、堀、原田

兩人、私と八人で、秋晴れの好天氣に洋服にワラジがけで出かける。道々のリンゴは赤く色づき、どこもイモやササゲなどの収穫に忙しい。九時出発、一〇時泥の木、木村に着いて休む。新道路を歩いたが予想外に立派だ。これなら下駄がけでもよい程だ。小野さんは自転車で先に行く。途中、兩岸の山水の風景は何と

も言われぬ。紅葉はまだ二分くらい、四〇分程で観音滝に着いた。刈り払った広場から眺める滝は実に絶景、四辺の山容樹木も美観を添え仙境のようだ。滝に下りて休み握り飯を食べたが、何とも言われぬおいしい味だ。観音安置所は先の岩が好位置と決まり、記念植樹をして二時半出発、途中、困 新公園予定地で、池掘りや植樹などの作業状況を見る。将来の名所になるだろう。家に帰ったのは四時、実に一日の楽しみを得た。夜、困で四、五人が集まり、安置所についている意見が出て、結局、第二予定地がよいだろうということになり変更した。

▼一〇月七日

起床五時半、洗面後早々に海岸へ出て見る。大謀を起しているが聞けば昨夜、八共同大謀で大マグロ三〇尾、ブリ一〇〇尾余りとれ、人気大いに引き立つたとのこと、沖村大謀も大マグロ七、八尾、サバ大漁だったとて、今朝(カ)横の通りで大安売りをやっている。私の家でも三〇銭買ったが、一〇銭で一〇〇尾くらいあるとのことだ。どうかしてこの

後も大漁でありたいものだ。渡辺で散髪後、保木回漕店新築場を見る。出来上がれば立派だ。学校前から禅源寺裏の墓地、池の周囲の焼き払った跡を見る。近々に植樹すること、将来はよい景色になろう。勇丸が明日出帆するというので農園へ行き、小樽へ送る12号をもぐ。好天氣で畑では出面三人でイモ掘りだ。帰って観音滝入仏式のピラ七枚程書き、夜は⑤へ部落会で行き九時帰る。

▼一〇月八日

起床七時、昨夜来の雨と風で時化模様となる。海岸へ出て見たが、この雨なので、浜で深呼吸など運動を一〇分程もやる。氣も清々する。帰って仏前に灯明を上げ、観音経を二回読経する。雨は止まぬ。熊さんも久し振りに家にいる。観音滝のピラを三枚書き、禅源寺へ持参する。長野、原田さんらも集まり、和尚と観音像の位置変更の件について話し、原田さんが位置変更について警察へ行く。明日、警察署長が実地検分すること。一一時帰り昼食後、堀さんと寄付金のこと、雨の中沢江へ行く。前回留守だ

つたところを廻り、二〇余軒で五円程を集めた。観音さんをまつるといふことなので、氣持よく出してくれた。帰ったのは五時、夕食後、一〇日頃小樽へ行くのでリンゴなどを支度する。新聞によれば五日未明、苫前村で大火があり、一五〇余戸を焼失し村が全滅という悲惨事、一〇月に入ってから罹災、どんなにか困ることだろう。

▼一〇月九日

六時起床、海岸を散歩す。昨日書いた観音入仏式のピラを向かい角、末政そば屋の壁に貼る。観音滝入仏式の評判は大したものの、来る一七日はどんなにか賑やかなことだろう。願うことは天氣快晴でありたいもの、観音さんのご利益で良いだろう。エビス倉へ熊さんと行き、公へのアバ縄一〇個を運び出す。私は明日小樽へ用達しに出かけるので、書いたピラを向かいの電気会社の高橋さんへ届ける。今秋、正が発動機船で岩宇地方で流行のスケソ延縄を試験的にやるとて縄、ヤメ、一匁針などを買って行く。これが成績が良ければスケソ漁の発展になり、また我々にとつて

も良い、有望な漁かと思う。午後、銀行へ行き小樽行きの金を引き出す。帰途③に寄りしばらく話す。夕食後床屋に行き本に寄る。来る一七日には団体で観楓会かたがた行くとのことだが賑やかだろう。小樽行きの支度をし一一時休む。

▼一〇月一四日

起床六時、近所をブラブラする。都会は早くから人通りがある。牛乳配達、八百屋、豆腐屋、勤めの人などたくさん通る。パイン屋で土産のパンを買う、出来立てでおいしそう、一円でひと風呂敷ある。これは何よりもよい土産だ。七時半出発、高太郎さんが停車場まで見送りしてくれた。願わくは夫婦壮健で成功を祈る。八時二〇分発車す、積丹の金杉、公主人といつしよになりいろいろ話す。金杉さんの弟、高商に入学中とのこと、九時半余市着。④、全に寄り商用を足し、一二時船の待合所で休む。助役さん、大澤さんと会う。一二時半出帆、上ナギで秋晴れの上天氣、実に氣持ち良い。二時に着く。土産物を広げると子供らは大喜び、四郎は目を丸くしてパンを持つ

て離さぬ。旧十六夜の月光は満天に輝き良夜、どうかして一七日は晴天であつてほしいものだ。

▼一〇月一七日

起床六時、禅源寺和尚さんから電話があり、今日入仏式をやるとのこと。早速支度をし、七時に出かける。善男善女が続々と集まる、八時頃になり、折悪しく一天にわか曇つて雨になり雪もまじる。この雨で一同落胆す。少し模様を見ているうちに一〇時になった。中止派と決行派でなかなか決まらぬが、とうとう和尚の決行ということで一〇時半、雪まじりの雨の中を出発す。それでも三、四百人の人の列となった。途中、泥の木で皆にモチを出す。山道をぞろぞろと歩き正午過ぎ会場に着く。観音経をあげ、一時半に式が終り昼食をとる。今日の雨で滝の水はいつそう勢いがよく、観音像を安置したら荘厳な感じになった。私は供物係兼会計係で忙しい。四時に下山する。私は木村で休み、六時頃家に帰ったが疲れた。

▼一〇月一八日

昨日の疲れで七時半に起床す。戸外を見れば日本晴れの上天氣、



昨日この天気だったらどんなにか賑やかだったろう、九時頃お寺から電話があり、精算したいとのこと、寄付帳を持参し支払いなどの経理をする。今日は寺の観音講だ、お参りをし昼食をご馳走になり二時に帰る。明日は役員、その他有志の観楓会を兼ねて慰労会をやることにした、会費は金一円。熊さんらは19号もぎなどで忙しい。一日日程前、岡崎市東洋製網へ綿ロープの照会をしたら、値段表と見本が早速来た。実に便利な世の中だ。

▼一〇月一九日

起床六時、小雨が降り出す。せつかく今日の日曜は楽しみにしていた観楓会だったが、この雨では外は無理なのでビヤホールに決まった。九時頃からだんだん晴れ

間が出てきたが座敷でやることになった。参加者三〇余名が集まる。午後一時より開宴し、飲む食うで三時過ぎ散会した。今日は程々にやり気持ちも良い。聞けば朝方、正主人心臓病にて急死したとのこと、実に以外であつた。古平の元老を失い惜しむべしだ。私は九時頃、自転車でお悔やみに行く。

▼一〇月二〇日

起床六時半、この頃はずいぶん寒くなり日も短くなった。昨日は観音滝慰労会をビヤホールでやったが、気をつけて飲んだせいとか、今朝は別に気分が悪いということもない。洗面後、四郎を抱いて浜へ出て見る。六、七〇〇トンの汽船が二隻入港している。海は荒れ模様のような。この朝もイカが五〇〇〜六〇〇もとれた。本年は以外にイカが豊漁で、入船町、港町辺りでは景気が良い。一〇〇円〜二〇〇円くらいの水揚げという。熊さんと天野さんは1号リングをもぎ倉に入れる。私は午前中、妻と倉片付けをし、リングを囲う場所場所造りをする。午後からは妻もリングもぎに行く。1号一〇〇斤程もあつ

たという。父は三時頃、正主人死亡でお悔やみに行く。寒い日であつた。リングもぎも冷たくて手袋をはいてやったという。夜、寒暖計は四五度Fくらい。

▼一〇月二一日

起床六時、洗面後、浜へ出て見たが上ナギだ。秋晴れの海はきれいで気持ちよい。海浜の新鮮な空気を吸うと気も晴れ晴れする。本陣の浜から校庭を廻る。何時見ても学校はよい位置にあり建物も立派だ。七時帰る。好天気でこの機逸すべからずと、熊さんらは板倉へリング運搬をする。妻も一〇時頃農園へ行き、半、鶴間のかあちゃん達も手伝って大根抜きをやる。その後、大根洗いだ。天気が良く暖かいので幸いだ。お姉さんらが菜を貰いに来る。父や子供達も来て、カボチャを煮たのを皆で食べる。父は正の通夜に行く。小樽から共栄丸が入り信玄袋などが届いた。

▼一〇月二二日

昨夜来の雨は今朝七時頃まで降り続ける。熊さんは例の通り農園行き、大根が本年は上作で売ることにする。今日も電気会社社員に四円、鶴間へ三円程売

る。一円に五〇本で昨年より値段がよい。私はこの頃、小樽のこや観音滝の支度やら取り紛れていて、しばらく店の事務も滞りがちだった。今日は帳簿の整理や手紙を四、五通書いた。一日増しに風も冷たく、積丹岳の中腹辺りまで雪が見える。若林かあさんが店に来る、どこの家庭でも物の心配がなければ精神的に、精神的に心配がなければ生活のことなど、何の心配もない家庭というものは無いだろう。実に苦勞の世の中ではある。父は夜正の通夜に行く。今日で三日通う。今頃の時期は気分が良いとどこへも行かれる。一日でもこうして過ごせれば幸福なことである。

▼一〇月二三日

起床七時、洗面後、外へ出て見れば近くの山々には雪が降って白くなっている。空は暗くて冬の景色だ。時々チラチラ雪が降り出す。子供らもも引きとか足袋などと言っている。正主人の葬式当日、私は葬式送りに八時半出かける。道路が悪い。九時半読経、一〇時出棺、会葬者多数で供花が四五、六もあり近頃

にない盛儀であった。正隆寺では町長、在郷軍人会、水産会、救難会、新地町内会、火防組合、木材会社、物産商組合などからの弔辞があり、その在世中の功績がしのばれる。佐渡出身者としての成功者、われわれ同郷人としても肩身が広い思いがする。一時半に終り帰る。夜、禅源寺で観音滝の決算調べをやる。暗く寒い夜だ。

▼一〇月二四日

朝夕は寒さが厳しく冬景色となる。今朝は朝から天気快晴、どこでも大根抜きで一生懸命だ。電気会社では今日、社員の慰労を兼ねて観音滝で観楓会をやるそうだ。この天気で楽しみだ。店はごく閑散、父は「直おつかさんが死亡しお悔やみに行く。帰りが港町みなと屋料理店で閉店セリがあったのを見てきたという。農園に6号、49号まだ残っているが農園もだんだんさびしくなる。

▼一〇月二五日

起床七時、寒くなった。手袋、首巻がほしいようだ。熊さん、妻らは49号もぎやら大根抜きなどで忙しい。小樽から田中仏壇屋さんが来て、弟子三人と今日

から仏壇掃除をやる。仏壇を分解して洗い、金箔もきれいになる。天気が良いので仕事に都合よい。その仕事で私もあれこれと忙しい。イカ漁は二〇〇〜三〇〇とれているので浜では景気が良い。父は港町のみなと屋でセリがあるというので見に行く。例年、今頃は気分が良いといそいそ出かけた。吉岡の右近さんから柿が小包で送られてきた。夜、妻、トミ、コノさん、熊さんらは大根の切り漬けを漬けている。寒い夜でコタツがほしい程だ。共立大謀から一、四〇〇円が入金した。

▼一〇月二六日

起床七時、この頃は朝寝して朝の戸外散歩も怠りがちだ。日曜日で晴天、観楓会にはおあつらい向きだ。在郷軍人会では射撃会を兼ねて観楓会があるというので、七時頃に分会員一行が行く。観音滝の敷地を木村から寄付してもらおう件につき、境界地を定めるべく米田、高橋、原田さんらが見に行く。私も誘われたがリソゴもぎで忙しいので見合わせた。熊さん、天野さんと49号をもぐ。妻も来たが暖かい日であった。五時に帰る。夜は妻、コ

ノさんらが大根の漬物の支度で一時間過ぎまで一生懸命やっている。私は観音滝の収支決算書などで一時間過ぎまでかかった。

▼一〇月二七日

起床七時、今晩二時頃から五時頃まで大雨が降り続いたが、朝になり晴れた。私は自転車で禅源寺の池へ、困の新しく出来た池へ入れる鯉すくいをやっているのを見に行く。一〇人からの人が引き網をやっているがなかなか入らない。フナばかりが多く掛かる。沖村大謀でサバが大漁したとて船に積んで売りに来る。木箱一つ二五〇銭で二箱買う。一〇銭で七、八〇尾の割になる。妻、コノさんら五人でサバをこしらえるのに忙しい。七時から昼過ぎまでかかってようやく終った。

▼一〇月二八日

起床七時、今日は亡き母の命日である。母は勤儉力行、世の荒波を渡り苦心された。そしてわれわれに対しては実に慈母であった。生前中のことを思い浮かべてありがたいやら懐かしいやらだ。今日も朝から雨降りだ。一〇時頃、また沖村大謀からサバ売りに来る。安いので今日も一モツコ

一円で買う。熊さんも久し振りで農園を休み、サバをこしらえるの手伝っている。私は倉庫で積丹行きのリソゴ三箱の荷造りをする。和尚さんが年忌で来られる。今日もまたサバ焼きで忙しい。少し大型になったようだが、一モツコで七〇〇尾ほどもあり、これで一円とは安いものである。夜になっても雨は止まず一日中降っている。幸治から、スキーを正課でやることになったので、スキーを買ってほしいと手紙が来る。

▼一〇月二九日

起床七時、熊さんは農園からリソゴを運搬する、一〇時頃からチラチラ雪が降り寒さは冬のようである。私は月末なので帳簿調べをする。熊さんは午後から集金。雪はますます降り出し、屋根も町も真っ白になり全くの冬景色となる。畑に干してある大根がしばれるかと、妻がムシロを掛けに行く。小樽の岡崎から大根入用と電話が来たので、共栄丸で送ることにする。田中仏壇店に来て仏壇の仕上げをしている、なかなか立派になった。初雪が地上で一寸くらい積る。

(続く)



鮑の殻



大澤 文子

大寒も過ぎ、はや立春もまたたくうちに過ぎゆき、春待つ心に胸をときめかせるはずなのに……。雪に明け雪に暮るる日々。春らしき太陽が雲間からぞくのは何時のことか。

ふと、走馬灯のように浮かびくるものは……。

あーあの頃、二月早々なれど燦々きらきらと太陽は照り、四月を思わせる陽気となった。

続く日差しに潮が引き遠浅になった岩場には、海苔を採る人影が三々五々、まるで絵巻模様を思わせる如く美しく感じた。

ご多分にもれず姑（はは）も海草を採りにゆくのが大好き、春の日差しが窓を透す頃には、早々に起きいで落ち着かない。家の中をいったりきたり、磯へゆく準備にいそがしい。

刺し子の半纏はんてん（はてそ）にもんぺ手製の手がけをはめ、長靴にはすべらぬよう、縄をしつかり巻きつける。手かごの中には鮑

の殻を何個も多めに入れる。岩の海苔を掻くたびにすぐ殻が欠けてしまうといい、いつも、『鮑を食べたあとの殻はとっておくように』

と姑から言われているので、鮑の殻は丁寧に洗い、いつも大切に保管しておくのだった。

そのみちそのみちによつて、必要なものがあるということを実感するとき知った。

やっと浜へゆく支度も出来たのか、姑は、

「いつてくるよー」と、楽しげに手を振り出かけてゆく。

「気をつけてねー、早く帰って来てー」

私は姑の背にむかい手を振る。「うんうん」

姑は振り向きもせず足早に、楽しそうに磯へ出かけてゆくのだった。

海の町に生まれ、海の町に育ちゆく人々はどんなに海が

大好きか、そしてどんなに大切か……。と、しみて思ったあの頃。

いつか私は、岩場に海苔掻く人々のことを短歌にうたったことがあったなアと、この真夜懐かしく思い出していた。

午後二時過ぎには浜から帰ってくるはずの姑を待ち、私は広い土間の片隅に一畳敷の座ざを敷き、その上に大きなまな板と包丁を用意しておく。

重い生海苔を背負って戻ってくる姑のために……。

「大漁だよー」

と、にこやかに海苔の荷を「ドン！」と土間に置く。

姑の妹の三浦ヒデ叔母さんもよく手伝いに見えている。トントンとまな板の上に生海苔をのせ、包丁で細かくたたき音が土間いっぱい広がる。

向かい合わせになって、生海苔を細かくたたいている姉妹のふたり、トントンと軽やかな包丁のリズミカルな音、私はじまをしないように、そっと茶の間の隅に座っているのだった。

何をひそひそ話しているのであらうか。時折り海苔を打つ音にまじり、笑い声も聞こえてく

る。

「いいなア」

私は声にならぬ声でつぶやく。やがて生海苔を打つ音もなくなり、天日に乾かすために、半紙大のすだれにのせているのであろう。

時折り「あつ落ちたよー」の声も聞こえ、作業は続いているのであろうか。均等にすだれに伸ばさなければ……。ということの声も聞こえてくる。やがて作業も一段落し、海沿いの一角にしまえてある干し場に手伝いの人もまじえ運ぶ音がする。よい日和が続くといいなアとも思う。

作業が終了すると用意しておいた茶菓で楽しむ。姉妹の会話をうらやましく思いながら、水だらけになった土間の掃除に余念のなかった私だった。

姑の手製品だった、少し厚めの海苔はおいしかったなア。と今でも思う。サツと火にあぶり、パリパリとかすかな音をさせて食する楽しみ、でも現在ではかなわぬ朝食となった。

あの姑手製の厚めの海苔は、私の手元にもうない。そして姑のために大切に保管しておいた鮑の殻もいまはない……。

— 札幌通信 第38信 —

ローソク岩の思い出

吉 川 義 雄

孤独の見本のような姿で、海中に屹立しているその岩は、味もソッ気もない「ローソク岩」と呼ばれている。

本来、その岩は余市領の中にあるので、古平のモノではないはずだが、ドソコイ、余市の人々は馴染みが少ないかもしれないが、古平衆なら、生まれた時から知っていると云つていいほどの存在である。

少年時代から、ふるさと古平を離れて、改めて故郷を想い出すとき、必ずといっていいくらい、大まかな景色を頭の中に想い浮かべる。

その一つが丸山であり、ハゲ山であり、海岸ではセタカムイ岩であり、ローソク岩のある風景である。

大正末期の生まれだから、海上には白帆が点々と浮かび、小学校での図画の時間では、誰もがその風景を描いたものだ。

古平のまちが唯一、自分の住む世界であることから、離れるまでいったい何年かかったことやら。

小学生時代、何人かの友人が、得意げに余市から汽車に乗ったことや、小樽のまちの賑わいを、身振り手振りを入れて話すのを聞き、外国旅行から帰った人の話を聞く思いがした。

次第に帆船の姿が消え、押見さんと共同経営の川崎船が、本陣の浜で改装されて、焼玉エンジンの付いた最先端の漁舟に変わったとき、これに乗せてもらつて、小樽という夢の国に行くことを、

ひたすら願つたことを憶えていた。

誰かの話の中に出た覚えもあるが、小樽のほかに、サッポロの話をする仲間など、誰もいなかった。

その未知の世界である札幌に、小学校を卒業するやいなや、直ちに住むことになるなど、全く思いも寄らぬことであつた。

外浜丸だつたか、瑞広丸だつたか、余市までの定期船の甲板上から、ローソク岩に満腔からの別れを告げたことを覚えていた。

その時から七年の歳月が流れ、異質ではあるが、同じような思いで、ローソク岩に別れの言葉を告げたことがある。

戦争に参加するために、召集を受けて、横須賀の海軍基地に出發する途路である。

昭和二十一年の春三月、奇しくも私の誕生日に故郷に復員することができた。ローソク岩に四年前、別れを告げた身が、立派に整備された古平の船着場に、定期船上からヒラリと跳び下り

古平衆にとつて、陸路を海岸に沿つて、余市に出るのは長い間の夢であつた。

沖村から、山上に出る道はあるにはあつたが、道の平坦を願う心は無ければ不思議だ。

戦後、鯨は次第に遠ざかつたが、鯨の思わぬ大漁で、古平は大変な活気がみなぎつていた。

加えて、人口は万を超えて賑わつていたし、民主化のハシリともいう首長選挙が始まり、地元から、民選の大澤吉三郎町長が誕生した。

大澤さんの偉大さは、自分がホレ込んだ伊藤助役を据えて、思いつきりよく、何でもやらせたことである。

陸路、余市までの古平衆の長い夢は、多くの悲劇的な事件を巻き込みながら、しつかりした足取りで進んだ。

どの随道も、何回も改修を重ねたが、路線の途中からは、ローソク岩の姿が消えたことはなかつた。

港

湾施設がなかった頃は、停泊している船と陸との間の人や貨物の輸送には、解ハシケと呼ばれる和船が活躍していた。ハシケブネというのが正しい名前とあるが、古平ではハシケと言えはいろいろな意味でとおっている。

定期船が運航するようになって、回漕店に近い海岸がその発着場となり、新地方面では国道十字街下の海岸、通称吉の浜、浜町方面ではチヨペタン河口、本陣の浜がその発着場となっていて、あゆみ板という分厚い板を渡してそれで乗り降りしていた。

昭

和八年に築港が出来る、現在の漁業組合前の岸壁が発着場となり、乗客の乗り降りや貨物の積み下ろしが格段に便利になった。

昭和一五年、現在の横川自転車店前辺りに、砂止めと言われる三、四〇㇁の築堤が出来ると、そこが新しく定期船の発着場となったが、海上の状況によつては以前の築港に発着することもあった。

定

期船の運航にかかわる波止場にはいろいろな思い出があり、人々の哀歓がたどった。

ている。

練漁期になると、大正時代は本州から汽船で、ヤン衆と呼ばれる人達が大挙して入りこんで来たが、昭和の時代には定期船が利用され、最盛期には臨時便まで運航して大いに賑わった。

戦時中には、出征軍人を児童や町民が軍歌を歌い、旗やテープで盛大な見送りをした。また、春は転勤などで来る人行く人出人出があり、訪れる人を迎え、帰る人を見送る姿が見られ、波止場はさながら社会や人生の縮図でもあった。

列車やバスはすぐに姿は見えなくなってしまうが、船だと出港

ら……定期船

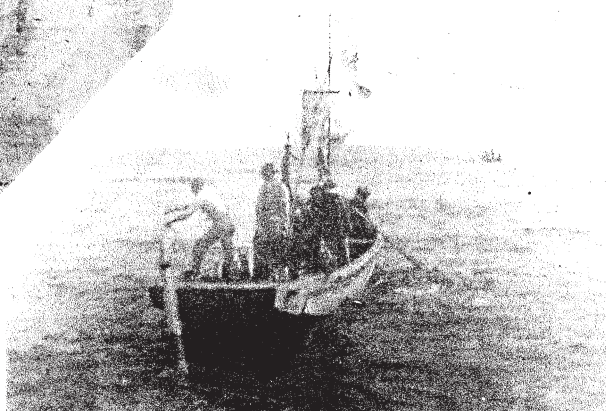
場の風景

してもしばらくは名残を惜しみ、海上遙かに去って行く船影に思いをはせ、去る人もまた海上から眺める光景に思い出を刻む。

船

便によつて地域住民の生活は辛うじて保たれてはいたが、海上交通は天候に左右されることが大きく、特に冬期間の日本海の荒天は漁業にも大きく影響した。

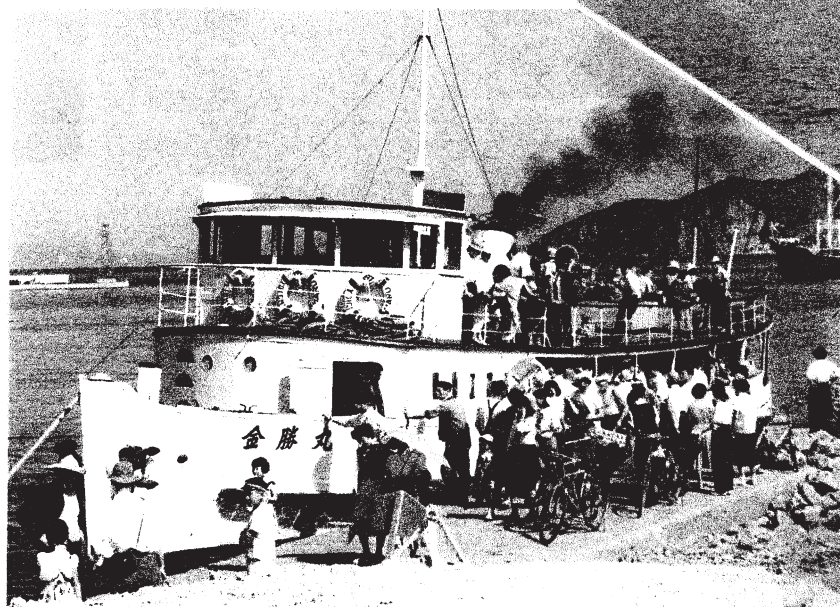
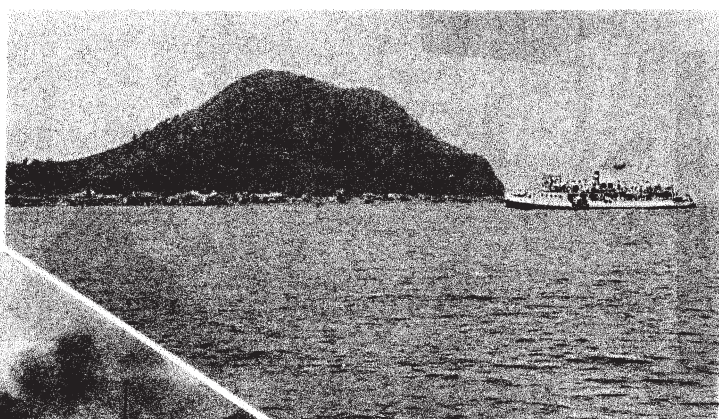
戦後は大型船が導入され、以前よりは大きいに改善されたが、陸上交通が便利になるにつれてその交通の遅れは地域の産業にも影響し、昭和二四年、余市から古平町にいたる区間の海岸道路建設が具体化した。



↑ 本陣の浜から出ていたはしけ (高野名正治さん所蔵)・戦時中は出征兵士を見送った →
← 余市町の茂入り棧橋から出港する金華丸



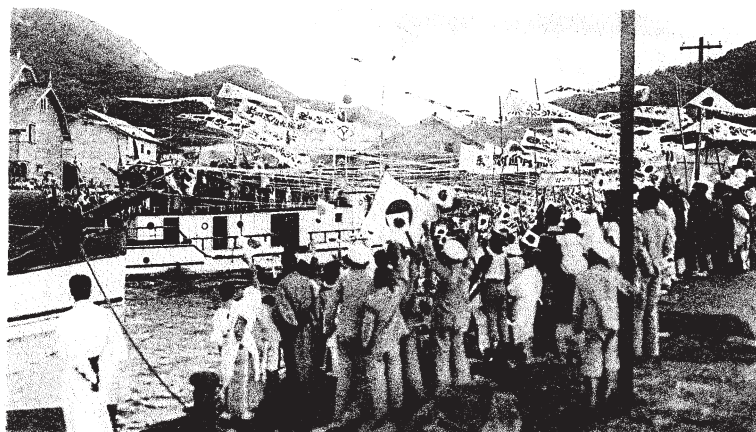
航跡を残して古平港内に入港
する金勝丸 →
砂止め岸壁からの賑やかな出
港風景：金勝丸 ↓



さようなら

波止場

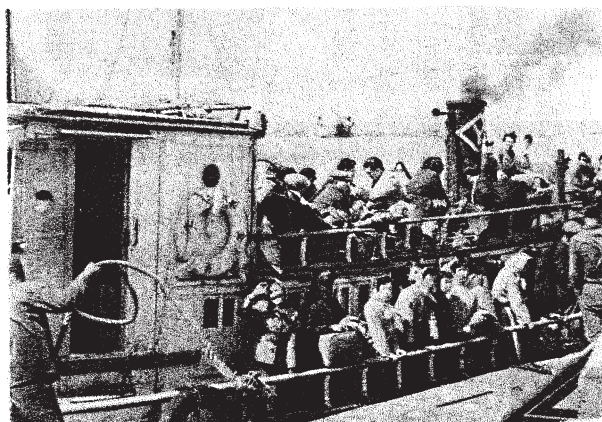
余市〜古平間は海上約一〇キロ、
自動車道は約二七キロで、これを
一挙に半分の約一四キロに短縮し、
神恵内への半島横断道路と、将
来は積丹半島一周をも視野に入
れた計画であった。
起工から一〇年の歳月と、一〇
億円を超える巨費をもってつい
に海岸道路は完成した。断崖を縫



← 歓呼の声に送られて…出征兵
士を見送る戦時中の風景

つての積丹国道は、半島の住民に
とっては大きな時代の幕開けで
もあった。当時の新聞記事や記
録によつて、その喜びのいかに大
きなものであったかがうかがわ
れる。
昭和三三年、この積丹半島を
走る大動脈の完成によつて陸上
交通は飛躍的に増大し、四〇年
以上も続いた定期航路はここに
幕を引くことになった。時代の流
れとはいえ感慨深いものがあり、
体験した人にとっては思い出と
共に、ときには一抹のさびしさ
が残る。

— 終 —



中 戦

泣き笑いの
樺太漁場体験記

後 戦

吉 野 慶 一 郎

敗戦の痛手から前途に不安を抱えて動揺している日本人に、立ち直る機会を与えるところか逆に、無法なへ理屈をつけては脅し、有無を言わせぬという強引なやり方は、やはり親分のスターリン譲りなのでしょうか。

その根底にある思惑は賄賂の要求です。だからそれに従ったからといって、必ず結果が期待できるというものでもなく、何の保証もない信用度がゼロの相手であることは、これまでの経験から身にしみて思い知らされてきました。

だがこのことが彼等の本性をよく見極め、恐れずに、しかも慎重に対処する知恵と勇気を私たちに与えてくれたのでした。「くるならこい！ 負けるものか！」

と逆に、次は何でやつてくるつもりだ。と、むしろ楽しみに待つ心の余裕さえ生まれるようになりました。

今、樺太は一年中で最も氣候のいい夏です。山々の緑は輝くように美しく、空も海も、どこまでも青く明るく、まるでのどかなパノラマでも見ているような気持ちで、あの一年前の悪夢を忘れさせてくれるようなひとときです。

この間の沿岸警備隊長の命令で、逃げない——密航はしないという船頭に替えて出漁したわが家の手繰り網も、穏やかな日とに恵まれ漁獲も順調で、野村系次郎さんが工場長をしている水産会社、冷凍用・加工用と納品していました。野村さんも大変お元気で、二人が会うとい

つも古平の話に花が咲いたものでした。

ゆがて盥盆も近くなると各家庭でもお盆の支度などが始まり、わが家でも亡父の新盆でもあり納骨のことなど話し合っていました。こうした矢先にある朝のこと、突然、またまた沿岸警備隊から思いも寄らない出漁禁止の通告が来たのです。

それは再びめぐってきた、あのいまわしい八月十五日を目前にした時でした。かすかながら平和を夢見ていた私には大きな衝撃でした。私たちの頭上にはたとえ晴天の日であっても、いつも目に見えない不気味さに覆われているのです。

なぜ私だけが沿岸警備隊に狙われるのか？ この裏に潜んでいるものが何かを探りたいと、むしろ興味を覚え喜び勇んで出頭しました。

「これまで隊長の指示に従って出漁しているのに、今また禁漁とはなぜか？」と詰問すると、

「吉野さんの漁船には、私が船主だという人が別におりますが

本当ですか？」

私にとって全くの寝耳に水、私は自分の耳を疑うと同時に、これにはやはり何か裏があると直感し、

「それは何かの間違いではありませんか。船主は吉野です。その人を今すぐここへ呼んでいたきたい。」

と強硬に出たら、間もなくその人が姿を現しました。

その人を見て、私は一瞬、今度自分の目を疑いました。それもそのはず、昨年春のすけそ漁から、その後一年間私の家の船頭をしてくれた、地元一流といわれるベテラン漁師の石山さん（仮名）だったからです。

早速、石山さんに、

「隊長は、石山さんが自分の船だと申し立ててと言っています。が、それは事実ですか」と聞くと、石山さんは申し訳な

さそうに、

「自分の船だなんて言ったことはありませんが、去年の夏、野田漁船団の緊急疎開のとき、真岡の艦砲射撃で北海道行きが不能になり、そこで野田へ戻され

教科書のいまゝむかし

■終戦直後の教育

昭和二〇年八月一五日、終戦となり日本は戦争に敗れました。これは日本の軍事的な敗北でしたが、明治から進められてきた軍国主義・極端な国家主義というような考え方が敗北したという点でもあります。そして、それを担ってきたのが学校教育だとも言えます。

終戦の頃でも義務教育の就学率は九九・八%あったといわれていますから、国内での教育はまだ十分な底力をもっていました。

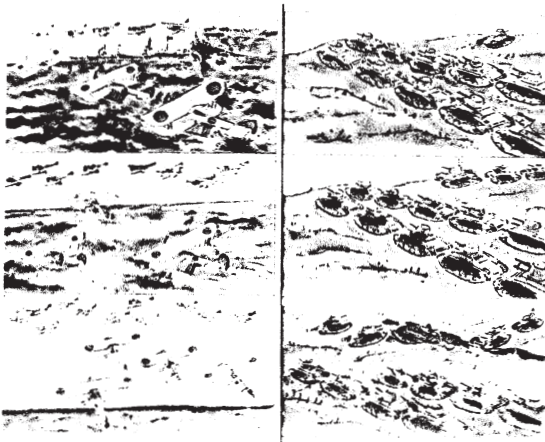
それでアメリカ教育使節団の勧告に従って、短い期間に大きな教育の改革を進めることができたのです。しかしこれが一定の軌道に乗るまでには、多くの難関が待ち受けていました。

特に戦時中のものが無い、金が無いという混乱状態から、義務

教育の延長は各市町村にとって最大の難問でした。

この改革でまず思い浮かぶことは六・三制、男女共学でしょう。そして、真つ先に学校教育の中心でもあった教科書が大きく変わりました。

←低学年の「さんすう」 飛行機や戦車で数をかぞえています



るときに、ソ連側から船の責任者として石山の名前が記録されていたと隊長に話したことがあるので、そのことを隊長が誤解していたんだと思います」

という答でした。そこで私は、「それは責任者として当然のことですが、だから船主だということにはなりません改めて石山さんから、船主は吉野であるとハッキリ言っして下さい。」

石山さんは隊長に、

「船主は吉野さんです」

と証言してくれたので私も安心して、隊長に、

「石山さんの話ではつきりしたのですから、明日から出漁できる許可をください」と

と言うと、大変不機嫌な顔で、

「真岡警備隊と協議するので、少し待ってください」

ここでも真岡の名前を使うことに疑問を感じました。

「それは野田管内の責任者である隊長の権限でしょう。真岡は無関係だと思えますが、それなら自分が直接真岡警備隊に出頭して、出漁許可をお願いしていきます」

と切り出すと急に笑顔になり、「真岡へ行くことはありません。二、三日だけ待ってクダサイ」

やはり思った通りでした。そして、三日後に訪ねたところ意外な返事が待っていました。

「私は今度転勤で、明日にも野田とサヨナラすることになりました。真岡から来る後任の隊長には吉野さんの出漁許可のこと、よく頼んで行きますからドーゾ安心して下さい」とのことでした。

←旧樺太の北緯五〇度日露国境線沿いに設置された境界標石(同時に同じものが外に二個作られ、小樽市旭展望台と札幌市北海道神宮に置かれた)



— 続く —

← 国史教科書
第一神国 一、高千穂の峯



■ スミぬりの教科書

戦争による衣食住の欠乏の中で、校舎や教材教具、教員の不足など緊急を要することはたくさんありましたが、平和と国土の再建という風潮の中で、民主主義ということが活発に前進を始めていました。

戦後のこの時期は、紙の不足もあって急に教科書を作ることも出来ないため、これまで使ってい

た教科書の不適当な課全部や、或いは文章の一部をスミで消したり、切り取ったりして授業が進められました。

従ってノート類も紙質が悪く、紙の表裏が極端で、鉛筆でよう

← 戦後を象徴するようなスミぬりの教科書



やく書ける程度でしたから、消しゴムを使うと穴があくという始末でした。

また、軍国主義に強い影響を与えたとされる地理・歴史の授業は禁止されていましたが、終戦の翌年、昭和二十一年六月になって地理、同年一〇月に国史の授業がようやく許可されるという状況でした。新しい教科書が間に合わないところでは、今までの教科書の不適当なところをスミで消して使っていました。文字の読めるところがほとんどないページもありました。

教室で先生の指示でスミを塗ったりしたのですが、それが全教科となるとずいぶん時間のかかる作業だったでしょう。

■ 新しい教科書

ところで国語教科書については、小学校における基礎学習のために特に重要であると認められて、昭和二十二年から使われるものを仮印刷して全国の小学校に配布しました。しかしこれは暫定的な間に合わせのものでしたから、新聞紙に印刷して折り

たたんだだけで、綴じてもいませんでした。ふちを切り割いてから適当に綴じて使っていました。

昭和二十一年に、新しく編集された『くにのあゆみ』(上・下)という教科書が文部省から出版されました。これは科学的な歴史教育という考え方から作られたものです。続いて、戦後全く新しい教科書として出てきたのが社会科教科書です。

一二年に『村の子ども』(五年生用)、『土地と人間』(六年生用)、引き続いて全学年用が出されました。これらの教科書は社会科の意図するところを述べていますが、初めての教科書でもあり、内容が一般的で、具体的に生徒に訴えるという点では力の乏しいものでした。

← 社会科教科書『土地と人間』



八月十五日

敵戦車古屯に侵入し、続く

私の持っている小銃弾は五発となつてしまい心細い限りだ。

こうなつたら敵の

兵器を分捕つてそ

れを使ってやろう

と足元を見たら、

西瓜を真つ二つに

割つたような半分

顔のないソ連の戦

死者がいた。傍に

自動小銃が転がつ

ていた。

「よおし、これを

使ってみよう」

と引き金を引いた

が弾が出ない。い

ろいろ小突いてみ

たが駄目だった。

その時、向い側

の草むらの至近距

離から突然機関銃

の猛射を浴びた。

こまでやつと助か

った戦友がバタバタと倒れた。

命の恩人だった沢田上等兵も太

腿に一発受けた。

突入すると敵は一人で、私は敵兵に躍りかかつて倒した。頭は丸刈りの中年の大男だった。真夏だというのに、厚い綿の入つた木綿のネズミ色の上着を着ていた。機関銃が転がつていたが、ソ連製の軽機関銃は日本のものより一回り大きく、弾倉は円盤状で七〇発連続発射ができる。

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

(40) 橘 義 春 [遺稿]

「タタタタ……」
弾は壁に命中したが、しばらく様子を見ても敵は現れない。向こうの松林まではツンドラで、何の遮蔽物もない危険な場所だが突つ切らなくてはならない。

生き残りの中に機関銃中隊の青木一等兵がいた。彼も敵の機関銃を分捕つて持っていた。この二丁の機関銃が生き残り組の戦力だ。

「さあ行こう」

と、ツンドラの草原を歩き始めたが、七〇メートル程のところ不思議な赤い旗が二本立っていて、その内の一本が動いているような気がする。それを確かめる余裕もなく、早くこの草原を抜きたいと気持ちはあせるが思うように進めない。

やつと草原の中程まで来た時、赤旗の反対側から機関銃の一斉射撃を受けた。ガバツとツ

みましようか。敵がいたら飛び出して来るとおもいますが」

「よし、撃つてみてくれ」

私は機関銃を撃つのは初めてだが撃ち方は知っている。狙いを定めて一気に引き金を引いた。

「タタタタ……」

弾は壁に命中したが、しばらく様子を

向こうの松林まではツンドラで、

何の遮蔽物もない危険な場所だ

が突つ切らなくてはならない。

生き残りの中に機関銃中隊の

青木一等兵がいた。彼も敵の機

関銃を分捕つて持っていた。こ

の二丁の機関銃が生き残り組の

戦力だ。

「さあ行こう」

と、ツンドラの草原を歩き始め

たが、七〇メートル程のところ

に不思議な赤い旗が二本立って

いて、その内の一本が動いてい

るような気がする。それを確か

める余裕もなく、早くこの草原

を抜きたいと気持ちはあせるが

思うように進めない。

やつと草原の中程まで来た

時、赤旗の反対側から機関銃の

一斉射撃を受けた。ガバツとツ

ンドラの上に平グモのように伏せたが、頭上すれすれに銃弾が飛んでいく。いつ当たるかと、冷や汗が流れ出た。あの赤旗が攻撃の合図だったらしい。射撃は二、三分だったと思うが、この時の時間の長く感じられたことは今でも忘れられない。

射撃がバタバタと止んだ。それ、今だ、私は機関銃を首から外して放り投げ、松林を目がけて一目散に走り出した。今度撃たれたらオダブツだ。草が足からまつて一度転んだが、ほうほうの体でどうやら松林に逃げ込むことができた。

ここでまた人数が減った。せっかく生き残った者がだんだん減っていくのはやり切れない気持ちだ。山家が無事だったのでホツとしたが、青木がいない。撃たれたのか？ いい奴だったのに残念だ。松林の中で集結したら一五名になっていた。機関銃を放り投げて来たので、私は徒手空拳の丸腰だ。あるのは自決用の手りゅう弾一発だけだ。

(続く)

わが友と語る電話に気付きたり声というものの老いがたからむ
吹き荒るる風にも吐く息ひく息のある如くにてひき入れらるる
吹雪の中を除雪終え来てしんしんとわが裡に吹く風鳴りやまず
野も山も雪に埋もるるしづまりを怖れてついに買い物なさず
ひとたびは明るくなりし雪の日も亦さむざむと片かげりゆく



瀧 内 優 子

言はざるは思はぬことにあらざるを川に捨てたし我のこだはり
掛け声をかけて寢床に起き上る喜寿なりわれの朝の始まり
しやきしやきと夕餉の米をときてより希釈されゆくわれの苦悩は
エプロンの汚るるところ何時となく決まりて厨に魚を捌きあつ
腑をぬかす扁平の烏賊ふかき夜の厨の闇に燐光放つ

編集雑記

▽今年の冬は、雪のせいか一月がずいぶん長いと感じたが、「二月は逃げる」のことわざどおりもう三月、

暦では毎年のことだが六日は『啓蟄』とある。だんだん暖かくなつてきて、穴の中の虫もそろそろはい出てくる、という意味だというが、雪国ではまだ縁遠い。しかし、なんとなく春を思わせるオマジナイのような言葉で、新聞でもテレビでもよく出てくる。

▽今年は大雪のわりには雪解けが早いようだが、雪に埋もれたところからは怨嗟(えんさ)の聲が聞こえる。こんなホコリを被つたような言葉を引つ張り出してこないと、雪は消えても、雪への怨みや嘆きは消えないようだ。

▽雪に追い討ちをかけるように、世界的な原油高による石油類の連続しての値上げ、これには国内がネを上げている。世界的に影響があるだけに、そのための国際会議も近々中

に開かれるとか。

▽先頃、大阪三井商船㈱が出版している印刷物にこんなのがあった。

「…世界有数の産油国であるサウジアラビアの港で原油を積み込むとき、船と港の間を往復し、物資を運ぶ役割をするバージ(艇)があり、それに水をかけてあげることがあります。彼等は水を貰うと大変喜びますが、これは、現地で供給される水は塩分濃度が高く、塩分ライからです。それで水をあげたりすると、時には原油を積み込む優先順位に関係することがあります。これは新しい『水と油』の関係でしょうか。…」

それなら、日本からタンカーに水を積んで行つて、帰りに原油を積んで帰つて来るのが早道というものかも知れない。

▽昨年の秋分にちなんだ「ボタモチとオハギ」にふれましたが、二二日は春分です。草木だけではなく人間も生き返るようです。

悠

雄詠「十二月号」主宰水見壽男

空澄みて遠山紅葉燃えに燃え 山口悦子

草紅葉瀬音かすかや溪深し
一陣の秋風袂ゆすり去る

残菊や蕾にいのち托しをり

弧を描き鷺天空を上り行く 越野敏雄

白雲に鷺こつぜんと現はるる

白菜の陽光浴びし畑の列

白菜の大地狭しと積まれをり

羊蹄山に雲一つ置き秋惜む 高橋重子

澄む秋や山また山を後にして

スカーフを弄びある秋の風

友よりの近況添へてきりたんば

淡く濃く色を流せし秋の川 室谷弘子

鮭漁の船腹重し昼の潮

晩秋の積丹岬うねり初む

さらさらと風の流れに秋の声 外山俊久

夕暮れの茜の空を雁渡る
秋の日と流れる雲に天守閣

海に來て行秋しかと波に見る 渡辺嘉之

行秋や木立鋭く影やはし

ひと雨を貰ひ紅葉となりにけり

海渡る風つれづれに秋となる

大空にはぜたる枝の木の实落つ 堀典子

群れなして風を切りゆく黄連雀

秋風にからみつきたる波重し

秋天や一点黒く鳶となる

川漁の終へて堤の野紺菊 本間寿昭

糶を待つ鮭選り分ける漁夫の業

星数へ漁火数へ月の道

指笛に鳶の一声初紅葉 【句評】

草木の露しぐれをり山の宿 越野清治

一瀑の吊橋遙か渦遙か

滝の渦二段三段真青なる

風と風ぶつかってある花野かな

上州の風と遊べる稲穂かな 【句評】

悠

雜詠「三月号」主宰水見壽男

雪虫の払へど群れて刻過ぎぬ 山口悦子

白きもの舞ひて落葉の美しく

秋時雨これも一景露天風呂

風はらむ雨も途絶えて今朝の冬

積丹の岬くつきりと冬日和

初雪の野辺に群れなす鳥の声 越野敏雄

冬山に祈願の拍手木霊して

時化続く漁港深々山眠る

冬蝶のなぎさを高く低く舞ふ

敷き詰めて踏まれずにある落銀杏 高橋重子

半島の懐深し崖紅葉

大根菜ほどよく漬かる昼餉かな

露天湯を塞いでをりし冬紅葉

小夜時雨行き交ふ船の音高し 室谷弘子

初冬の風に大潮ぶきみなる

初霜の光天地に燿へり

漁師らの訛飛び交ふ小六月

水澄めり風音澄めり秋日和

水車小屋長旅終へし蛙跳ねる 外山俊久

汗の湯気山の放牧馬肥ゆる

海黒く雲垂れ込めて冬近し

木枯に翻弄されし波飛沫 渡辺嘉之

小春日や峽に忘れ雲のありけり

冬めきて鵜安らぐ波のなくなる

冬めきて鋭き木立雲を射る

沖はるか時雨は海を移り来る 堀典子

冬霞斯く柔らかき沖の空

海鳴りのきこえ来し岬冬に入る

大波の碎け散る時冬の虹

海鳴りの風定まらず神の留守 本間寿昭

鰯漁の今釣る時ぞ潮目荒れ

素手で網捌く船間の冬ぬくし

七十路となるも鰯場へ船を出す

秋雨や一舟もなく海の風 越野清治

崖紅葉まで上り来る岬飛沫

秋雨や海は凧ぐとも凧がずとも

峠より湧き来し雲や冬近し

海原の暗き明るさ冬近し

■北海道新聞『日曜文芸』高橋笛美選

浜言葉飛び交ふ港冬に入る 渡辺嘉之

海鳴りや風定まらぬ神の留守 本間寿昭

■『俳句朝日』二月号 今井千鶴子選

星飛んで神威岬に刺さりたる 越野清治

短歌

古平町岬短歌会



古平俳句会

書の審査初めて受けし「和」の文字を卒寿記念にと壁に
吊しぬ 池田 テル

明け初めし清しき空に昇る日を拝するわが身心洗はる
金子 寿子

美しき紅葉の里に一夜宿り「年金に感謝」を友らと語る
坂本 信子

昨夜よべの雪うつすら載せる庭の松孫らと眺む新しき朝
鈴木 時子

遠くなり近くなりして漁火は波間にうつるそのすばらしさ
竹内 コト

雪捨てに疲れた体癒さむと鍋を囲みて束の間和む
田中 香苗

今朝も降るひとり居の人を思ひつつさあ頑張ろうと除雪の
支度す 丹後 初江

難病の妻がつひに叶はざりし娘この元へ行くこの正月は
寺田 清治

幾年も相合ふこともなく過ぎし甥の写真の口髭の顔
東 美知

寄る波の磯岩を打ち散る飛沫波どめを越ゆるときらめけり
堀 典子

雪吊の縄一本のゆるみなく 斉藤波留

雪眼鏡伊達と見られて気恥かし 山口悦子

初硯祝ひ組文字福寿草 越野敏雄

咲き揃ふ水仙の香の匂灯来る 大和田絵伊

遅れ来し友の賀状に安堵して 高橋重子

除夜の鐘今年は居間で遠く聴く 仲谷比呂古

潮を読み風を読み取る漁始 室谷弘子

掌に降りては消ゆる牡丹雪 外山俊久

雪雲のたちまち空を傾ける 渡辺嘉之

笠雲の影おく雪のくきやかに 堀 典子

日捲りの厚き重さに年明ける 本間寿昭

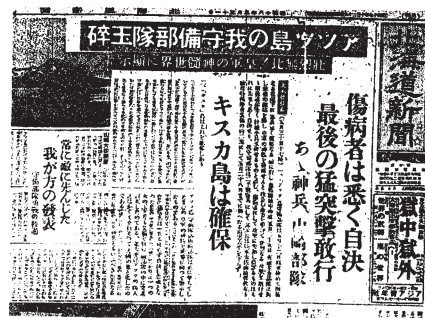
白樺に樹水の光たわわなる 越野清治

古平町史年表

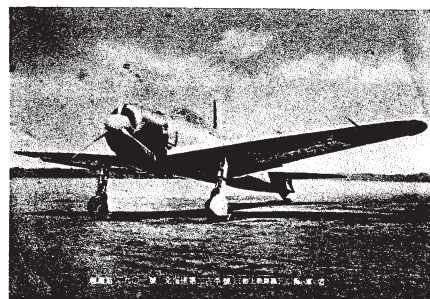
- ▲俱知安町の映画館布袋座の火事で208人が焼死
- ▲古平青年学校が一泊の宿泊をともなう2週間の特別訓練を行なう
- ▲米軍がアッツ島に上陸、日本軍守備隊約2500人が全滅する、古平町出身の戦死者も出る(5/29)
- ▲金属回収に協力し、古平国民学校では補助貨幣(円未満の金属貨幣)の回収を行なう、紙幣になる
- ▲女子青年勤労報国隊の出発式が学校で行なわれ、児童等が見送りをする
- ▲北海道食糧営団古平出張所が設置される
- ▲千歳飛行場建設挺身隊が動員される
- ▲大政翼賛壮年団が中島グランドの整備作業をする
- ▲魚類製品も町外への持ち出しには漁業会の証明書が必要となる
- ▲鳥取県で大地震が起き死者1083人、家屋全壊7485戸の被害が出る
- ▲有珠山麓で激しい地震が起き土地が隆起する、これが後の昭和新山である(12/28)

昭和19年(1944)

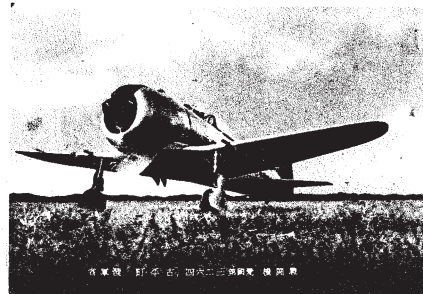
- ▲戦闘機(ゼロ戦)の献納式が古平国民学校で行なわれ、古平号と命名される
 - ▲金属回収令により、金属製のボタンも回収され、木製や陶器製のボタンが市販される
 - ▲町民の勤労奉仕により、チョパタンの沢に炭焼きのかまど造りをする
 - ▲鯨が大漁となり、古平国民学校では5年生以上の児童が10日間の臨時休業となる
 - ▲余別登記所が古平登記所(新地町高台)に統合になる
 - ▲翼賛壮年団が留寿都村へ援農隊として動員される
 - ▲古平一小樽間運賃積み船の長栄丸が時化のため高島沖で沈没し、乗組員全員が死亡する
 - ▲煙突の飛び火で浜町竹内薬店の天井裏から出火したが、近所住民のばけつりレーで消火する
 - ▲金属回収で供出した二宮金次郎銅像の跡に、石像が設置される
 - ▲稲倉石鋳業所が稲倉石から余市までの第3索道の建設に着手する(完成前に敗戦となり建設は中止される)
- 国内の金属類が不足し、ついには家庭のなべ・かまの類までが→供出させられた。北海道庁に金属回収本部が設置される



↑ アッツ島の「玉砕」を伝える
北海道新聞(5月31日)



↑ 古平町が献納した戦闘機
愛国第三二六四 海軍省



↑ 北海道第二古平号 陸軍省

